

言葉と音楽の境界

—— 現代文学とパフォーマンスの試みから

鈴木正美・メディアと表現

●要約

現代音楽においては様々な実験が行われている。特に詩人とミュージシャンとのコラボレーションは言葉と音楽との共闘と共振、あるいは闘争と反発によって豊かな表現を可能にしてきた。こうした実験の中からウラジーミル・マルトウイノフ、グループ・アルハンゲリスク、ポップ・メハニハ、ビートフ・クインテット、ドミトリー・プリゴフ、多和田葉子と高瀬アキを具体例として取り上げ、言葉と音楽によるパフォーマンスの芸術的可能性について考察する。

言葉と音楽の身体性の欠如がもたらす影響や音楽教育という制度がもたらした弊害は大きい。現代音楽における「音そのもの」の復権と現代文学における「言葉そのもの」の探究は、言葉と音楽の身体性の問題と深く関わっている。

音楽や言葉に「意味」は必要なのか？ 「意味」のない音楽や言葉は芸術なのか？ はたして「音そのもの」「言葉そのもの」を重視する現代音楽と文学の協働作業は豊穡な表現を創出することができるのだろうか。

●キーワード

言葉と音楽

パフォーマンス

現代音楽

ロシア詩

テキストと身体